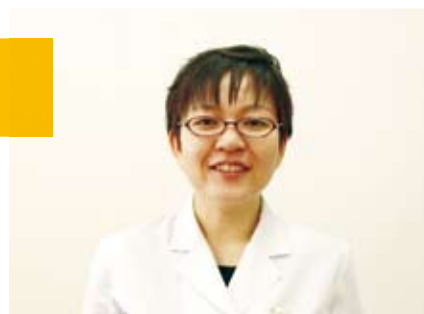


# 在宅薬剤師『やまね』の訪問日記

第12回

株式会社ファーマシイ 山根 暁子



在宅訪問をするうちに、他職種の仕事を目の当たりにする機会が増えた。ヘルパーの方の仕事はなんとはなしに想像できていたが、訪問入浴サービスや訪問歯科診療などは百聞は一見に如かずで、目からうろこが落ちる体験だった。

\*

患者さんの自宅を訪れる歯科医は、虫歯を治すだけではない。訪問歯科診療の仕事は、私が思っていたよりもかなり多岐にわたっていた。

ベッドですごく時間が長い患者さんの口腔内ケアの重要性は、社会的な認知が足りていないが、口腔環境の正常化は絶食の患者さんであっても必須で、唾液を含む誤嚥性肺炎の発症リスクを大きく下げられる。

歯磨きは、日常生活の一部だ。その大切さが歯科医、歯科衛生士によって在宅チームの中の介護看護スタッフや家族に伝授され、患者さんの日常生活の中に根づくことで期待される成果が上がる。在宅チームの教育も彼らの仕事だ。

また、嚥下機能の正しい判定によって、その人の残存能力に合わせた正しい食形態を提案し、チームで実践するのは、QOLを高める観点でも欠かせない。逆に、そこをおろそかにすると、ある意味で医療ネグレクト、寿命の短縮につながる怖さもある。摂食嚥下の機能の高度さ、複雑さについても、市民の理解はまだ十分ではない。絶食の方であっても、自分に合った義歯の装着が必要——。こんなことが、ようやく少しずつ知られつつある段階だ。

\*

先日、最期まで口から食べる喜び、最期の言葉を伝え

られる口腔環境の実現に尽力していらっしゃる歯科医の方に招かれ、薬局スタッフとともにおじゃました。当薬局が、摂食嚥下トレーニングで使用するゼリーなどを取り扱い始めるのにあたり、製品がどのように使用されるのかを知るためにお手伝いすることになったのだ。

ほんの顔合わせの試食会の予定だったが、先生は我々への説明のためにスライドを用意し患者さんの“物語”を熱く語ってくださった。これから私たちが届けるお手伝いをさせてもらう製品を、どんな患者さんが、どんな気持ちで待っているのか。実際にベッドサイドに寄り添い、時間をかけて「食べること」を支援している人からお話をうかがい、窓口のやり取りだけでは得られない視点があることを薬局スタッフに伝えていただいた。

「仕事は誰かの喜ぶ顔が最大のモチベーションになる。そこを実感してもらうのが大切」——。お礼状への返信に書かれていた先生の言葉にはっとした。窓口で完結する仕事に慣れてしまった薬局スタッフに足りない経験、それは誰かに喜んでもらえるといった経験がないゆえに生じる医療人としての自覚の薄さ、他職種と比較しての情熱の低さ。

心から喜ばれる経験を増やせば、薬局の業務はもっともっと面白くできる。与えられた仕事をこなすのではなく、どうすれば喜んでもらえるのか、もう少し言葉を足すと一時的に喜んでもらうだけでなく、どうすれば地域住民の生活の役に立てるのかもわかってくる。そして、患者さんを笑顔にさせている他職種が身近にいてくだされば、薬剤師はどのように患者さんと接すべきかに気づかせてもらえる。一医療職として成長できる。

他職種連携万歳！